

砂連尾 理

振付家・ダンサー

トヨタ コレオグラフィーアワード2014・選評

私は今回の審査会に当たって、特に以下の二点に着目し審査しました。

1、『現在の社会情勢や近年、日本が抱える様々な問題に対してきちんと呼応しようとしているかといった時代性。』

この問いに対する応答はダンスに限らず表現全般に対して求められていると感じています。2011年の震災以降の私たちを取り巻く環境は深刻ですし、特に現政権に変わって以降は諸外国との関係だけでなく国内に於いても緊迫した状況が生まれています。更に、近年の法整備によって表現することや公の場で踊ることそのものへの取り締まりも強化されようとしています。ダンスに関わる者として、そういった状況に無関心ではられませんし、そこに目を塞いで無邪気に踊ることは思考停止を意味します。ダンスが私たちの生き方や社会を考え、未来に向けた様々な可能性に向かって開かれていくためにも、こういった現状に対する何かしらの応答をダンスも引き受けていくべきなのではないかと思います。

2、『多様性を守り自由な精神が担保されていくための身体技術。』

様々な表現の仕方があるダンスの中、コンテンポラリーダンスは明確な価値基準を設けず、まさに多様な表現を担保するところに魅力があるのですが、それは同時に曖昧さや不可解さを併せ持ってしまう分かりにくさがあります。しかし近年、その多様性を守っていこうとする自由な精神が何より脅かされつつあること、またそれが無意識なレベルで進行しつつある現状にとっても危機感を感じています。コンテンポラリーダンスを担保していく上での自由な精神を守っていく為にも、今何が必要なのか？多様で曖昧なものが生き残っていく上での戦略を、個人的にはそれを舞台表現としてのダンスを捉えるのだけではなく、それこそ日常をきちんと生き、様々なコンテクストとの関わり、そうした地道な実践によって育まれた身振り、動きを振付としてどのような形で提示しようとしているのかが重要だと考えます。

以上の観点から私は今回、振子びじんさんの「no title」を推しました。その理由は彼の作品から今の日本の現状を浮き彫りにし、そこに対する問題提起と、そこに向けた彼の応答＝意志を動き、振りとして表明しているように見えたからです。ダンスの構成としては振子さんか YANCHI.さんのハウスダンスを模倣しながら展開していきます。(ハウスダンスとはディスコダ

ンスの一つで1970年代にアメリカ・シカゴで発祥—ウィキペディア)そして動きのトレースが進んでいくにつれ、掬子さんの動きは模倣するだけに留まらずハウスダンスのリズムに合わせ、それは彼の出自である舞踏的な動きなのか、舞踏的解釈な自由な動きなのかは定かではありませんが彼独自の動きが挿入されていきます。そしてハウスダンスと彼の自由な動きをブレンドした形で徐々に異なる二つの文脈の動きはハイブリットなダンスとして楽しげに浮かび上がってきます。このまま二人の出会いから生まれたハイブリットダンスをリズムに乗せ饒舌に、いわゆるダンス的に踊るだけなら異なる文脈のコミュニケーションの可能性に付いて、そのハウトゥーを提示するに過ぎないところで終わっていましたが、掬子さんはそこから更に一步踏み込みその動きを解体していきます。しかもそれはフォーサイスの格好の良い脱構築ではなく、脆く儂く、弱々しい身体が浮かび上がってくる解体で、その危うさの中でしか振りを紡げないかもしれないし、踊ることが出来ないかもしれないといった解体ダンスでした。そしてその解体は掬子さんだけに留まらずハウスダンスを教授していた YANCHI.さんの動き、身体にまで及んでいきます。そうした展開に私は近代以降、更にいうと第二次世界大戦以降の日本の辿ってきた歴史、それは西洋化、アメリカ化(=資本主義化)していくといったキメラな身体に豊かさと幸せを見いだそうと我々が抱き続けてきた幻想、そんな無意識に抱いてきた関係が正に崩れ溶かされていくような感覚を想起させました。そして、そういった関係を見つめ直し、そこを解体したところから、実際、そこを解体してしまっただけでは寄る辺もない危うい弱々しい身体しか残っていないのだけれども、敢えてそこから今一度、特に震災以降の生き方はそうした中から掴み取っていくしかないのではないかという身振り=意志を掬子さんの振付、そのダンスから見出し、私はそこを評価し彼を支持しました。ただし残念だなと感じたのは、本当はその先を少しでも良いから提示して欲しかったと思います。そんな脆く弱々しい身体にはやはり抗っていくのか、じっと耐え忍ぶのか、はたまたその脆さを受動したところに新たな価値を見いだしていくのか。弱さの強さ、そのしたたかさを感じさせる身振り=ダンスを個人的にはとても見てみたいなと思います。

それには、掬子さんがいわゆるコンテンポラリーダンス的展開、それは或る問いを設けてその解を明らかにしていくといった西洋的なコンテクストに則った手法から一旦離れて、(彼は恐らくコンテンポラリーダンスが要請する作舞法を既に心得ているようなので)全く異なるコンテクストに身を置いたところからどんなダンスを立ち上げていくのか見てみたいなと感じています。

以下、上演順に私の感じたことを記します。

■ スズキ拓朗さん・「テテテテテテテテテテ」

スズキさんの作品は動きと言葉を音化しながら組み合わせ、ミュージカル風な仕立てでダンスを作っていました。スズキさんのダンスやキャラクターも相まって、こういったあっけらかんとした明るさは今の時代の舞台芸術にはある意味必要だと思います。ただ、今回上演された演目に目を向けた時、スズキさんの作品は衣装、映像など趣向を凝らし、群舞、小道具等も用いながら空間構成や照明等、いわゆる演出効果は意識的に取り組んでいるものの、今回の作品の重要なモチーフになっている震災時の届けられなかった手紙、そのテーマを通して訴えていくところは表層的なところで留まっている感じがしました。それは特に、私個人が震災後、東北の仙台や名取に何度か通い避難所生活者取材したりしている経験があることから余計にそう感じるのかもしれませんが、そういったテーマを取り上げるのなら、そこでの声や空気にもっと触れた作品作りを行って頂けたらと思います。そうした作業を繰り返し行なうことで今回の作品の振りや音楽はきっと深い彫りを帯び、そこを更に掘り下げていくことで暗さや悲しさを越えた先にある希望＝明るさを獲得し、味わい深い作品になるのではないのでしょうか。しかしながら、今回のスズキさんの最終審査選出がエンタテインメント的なダンスを志向する人たちにとっての励みになっているとしたら嬉しいです。彼の選出を励みに、今後、彼を目指して後続く者から、例えばヤン・ロワース&ニードカンパニーのような存在を生むきっかけになれば意義のあることですし、彼を選出したビデオ選考時の審査委員の見識は後に評価されるべきではないかと思います。

■ 木村怜奈さん・「どこかで生まれて、どこかで暮らす。」

木村さんの作品には話し言葉、方言が作品の重要なテキストになっています。冒頭の2、3分による無音で、静止シーンの後、振付家の木村さんの出身地である青森弁？弘前弁？の携帯による会話音が流れるのですが、この方言が、その音を聞いている私の身体をムズムズと突き動かす、何だか妙な気分させられました。これは終演後に伺った話しですが、その会話音を他の出身地のダンサー（兵庫、大阪、大分）に聞かせ、その語感から振り、ダンスを紡ぎだそうとしたと聞いて、その着眼点はとてもユニークで面白いなと思いました。また、そうした話し言葉の交換は振付家とダンサーだけに留まらずダンサー同士の方言の交換へと広がり、その相互作用からも振りを紡いでいきます。そして、そこで紡がれた振りを丁寧に採集し、それぞれのダンサーへ動きとして再編集し身体に落とし込んでいきながら、三人の動きがシンクロしていき、それぞれの身体は点から線になり、平行に存在していた時間と空間が混じり合うダンスとして展開されていきます。そうした振付に、自分とは異なる場所と時間を過ごしてきた

他者に対する柔らかく優しい眼差しを感じましたし、またそれぐらい慎重に対話、コミュニケーションの可能性を探る姿勢に私はとても好感をもちました。ただ、そうした丁寧な姿勢は評価出来る一方、全体を通してもう一つ心動かされ、新たな視座を見開かされるような振付は少ないと感じたことも事実です。それはもしかすると、そういった振付、ダンスを作らざるを得ない切実な何か、そうすることによって観ている者の心を動かしたい振付家の欲望=希望といった、木村さんのこの作品に対する根源的な欲求を私はもっと見たいなと思いましたが、その突き詰めが現時点ではまだ弱いのではないかなと感じました。意地悪な言い方をすれば、ダンスに対して少し誠実すぎるのかもしれませんが。もっとダンスに対し嘘をつく勇氣を持っているのではないかと感じます。ただ彼女の今回の試みは評価出来るので、もっと突き詰めて欲しいなと個人的には考えます。また、彼女の試みから私は、知人の沖縄出身のアーティストがその土地の言葉、方言が伝承されなくなった時、そこの踊りも消えていってしまうと言っていた話を思い出しました。そう考えると、今回の方言の語感を頼りに行う身振りの発掘は、もしかすると失われてしまった動きや、踊りという形には残らなかった身振りや動きが語感を入り口にして発掘するといった新たな振付法が発明されるのではないかと考えますし、それはポストコロニアル的な視点からも面白い試みになるのではないかと思います。その研究の先に個人の身体を超えたところに存在する、我々のDNAの中に受け継がれている普遍的な動きが立ち現れてくるかもしれません。

■ 塚原悠也さん・「訓練されていない素人のための振付けのコンセプト001／重さと動きについての習作」

塚原さんの作品は寝ている者の上に人が乗るというシンプルなコンセプトの元に行為が展開され、重さの負荷を負っている者の身体と負荷を与えようとする者の身体の変化が、時間と共にその懸命さが動きとなり、その喘ぎが音楽的にも変換されることによって徐々にダンスが発生していき、その模様を舞台上に設置してあるカメラで寝ている者の顔をアップで投影する演出も加え、様々な感覚を刺激する作品でした。その演出や構成は巧みに計算され、しかも構築と即興を行き来しながら、振付や舞台に於けるダンス作品の本質を問うものになっていました。また、終演後、今回の振付方法を記したものをA4用紙にまとめ配布し、ダンスを振付家だけの所有物とせず観客とシェアし発展出来るものとして開いていく姿勢にも、とても共感するものがありました。塚原さんの作品を見ていていつも思うことですが、彼は舞踏を含めたポスト・モダンダンスの文脈をきちんと踏襲し（歴史を学び）、そこに現在の舞台芸術、美術の文脈も意識しながら、そこをどう乗り越えていくかということを実感的にしかもラディカルに実践しようとしている数少ないアーティストの一人だと思います。そういった振る舞いは、コンテンポラリーダンス界が成熟（資本化）、また特にシステム化されていく過程で訪れる今日的な閉塞状

況では、そこを意図的に打破し、揺るがしていく存在として彼が果たしている役割は大きいと感じます。今回の作品も誰もが試せる遊技性の中にダンスを見だし、しかもポスト・モダンダンスがシンプルだからこそ陥った退屈さも彼の演出によって面白くパフォーマンス化されていました。しかし、その面白さは既存のダンスに対するアンチテーゼとして、知的なレベルでは刺激的だと感じ、それはそれとして明快でインパクトはあるものの、そのインパクトを超える実感がもう一つだなと感じました。それはもしかすると、塚原さんのダンスを捉える視点が、「殴り合う身体」や重さに耐えるといった時に作用している力「⇔、↓」といった、身体、振付にある意味、記号的に捉える客観性が私をそう感じさせてしまうのかもしれませんが、もちろん、そういった記号化はダンスを一般化し、多くの人にダンスを開いていく可能性は感じます。ただ、そういった身体と距離を置いた客観的な視点によって生み出される振付よりも、身体の内側から世界を捉える主観的な視点、それはややもすると曖昧で不合理と捉えられてしまう踊りかもしれませんが、そんな身体自身がフィクショナルに変容していくダンス、振付に私は与したいのかもしれませんが。知的さやスタイリッシュに加工されたものでなく、それこそ知的な思考が機能しないところ、それを単に野性的な振る舞いとしての演出に求めるのではなく、たわいもない日常から耕された肉感性、その先に存在する身振り＝振付をもっと見てみたいなど感じました。しかし、そんなダンスはもはや Gonzo（風変わりな、異常な）ではないのかもしれませんが。

■ 川村美紀子さん・「インナーマミー」

川村さんの作品は自身を含む4人のダンサーとのクアルテットによるダンスでした。その構成はダンサーが一人ずつ登場し、「コンビニエンスストア入店音」や「緊急地震速報音」、「横断歩道のとうりゃんせ」、「エレベーターの案内音」、「山手線案内音」等の日常的に聞こえてくる音声に振りを付けていきながら動きの主題が提示され、時間の経過と共にその動きが色々な組み合わせで重なっていきます。そして終盤に向け4人のダンスはより激しさを増し混沌としていきながらも、その混沌は突然終わりを告げ川村さんが一人舞台上にポツンと佇む静寂なシーンへと続きます。そこから突然、舞台上にキューピーの人形が現れ、人形が各舞台袖に現れては引っ込んだり、ラジコン仕掛けの台車に乗っては舞台上の上手から下手まで移動するその様子を川村さんは眺めたり、追っかけたりしながら、最後にはそのキューピー人形を舞台中央に挟んで並列された4人のダンスが提示されたところで作品は終わっていきます。川村さんのエネルギーでダイナミックな動きは魅力的で彼女が素晴らしいダンサーであることは間違いないと思います。ユニークな組み合わせの音響や四角で区切り幾何学的に配置する照明にキューピー人形をメタファー的に使う舞台美術等、彼女が動き一辺倒ではなく総合芸術としての舞台作品に意識的な振付家であることも確かでしょう。また審査前に貰った資料映像や Youtube に上がって

いる幾つかの作品からも伺えるように、川村さんのエキセントリックで時に破天荒なエネルギーは既存の価値を揺るがしていく可能性も秘めていると言えます。そんな彼女が今回のアワードという場に於いて何をやらかしてくれるのだろうと個人的にはとても期待していました。ただ、今回の作品に関しては、先ずタイトルとダンスの関係、そしてダンスから立ち現れてくる世界が、ある女性の内面であることは理解出来るのですが、それを表現することが今の社会にどう応答するのかといった観点からみると良く分かりませんでした。また今回の、そういった私小説的なテーマからダンスを展開するドラマツルギーや彼女のストリートダンス+モダンダンスによる振付にはあまり新鮮味を見出せなかったというのも実感です。単純に私が現在持っている問題意識とは重なり合わなかったということなのかもしれませんが、以上の点が私にとって彼女を推せなかった理由でした。しかし、ややもするとコンセプチュアル(=頭でっかち)に陥るコンテンポラリーダンス界において彼女のような存在は確かに貴重だと思います。オーディエンス賞を受賞したことからも分かるように、彼女のダンスが、その身を前面に押し出すことで観る者を心地よく楽しませていることは間違いないでしょう。しかし私は、彼女がそれだけのエネルギーと魅力を持ち合わせているからこそ、ダンスが消費されていくような場だけに留まらず、彼女が持ち合わせている奔放さのその先にきっと存在するであろう、ダンスが本来持っている呪術的な毒性にもっと目を向けて欲しいなと感じます。個人的には、彼女がそんなダンスから毒性を排除せざるを得なかった社会や宗教の歴史に目を向けた時、そこからどんなダンスが生まれるのかは、とても興味があります。なぜなら、そこからは近代以降が抱える様々な問題に応答する何かが、彼女のダンスから生まれてくるのではないかと期待するからです。

■ 乗松薫さん・「膜」

乗松さんのカンパニー”太めパフォーマンス”の作品は、ぽっちゃりした女性二人のダンスで、そこには西洋ダンスに於ける美の批評やジェンダーの問題提起が振付家の狙いにあったのではないかと想像しますし、それをユニーク且つグロテスクに描こうとしていたように感じました。実際、私がこの審査会で笑ってしまったのはこの作品だけでしたし、そのぽっちゃりした身体を強調させる演出には、マギー・マランのいわゆるダンサーに太った着ぐるみを着て踊らせる「grooseland」を実際の身体で実践しようとしていることを想起させました。ただ、その狙いとは裏腹にそこを観客に訴えるだけの動きのバリエーションと、そこを成立させるだけの身体技術がまだ不十分な状態ではないかと感じました。太めだからこそ出来る動き、太めだからこそ出せる豊かさを、それこそ西洋的なダンスだけでなく日本や東洋の踊りにも目を向けてもらいたいし、また踊りだけでなく相撲やスポーツ、儀式などに着目するのも良いかもしれません。そうした中で行われている動きも研究し取り込みつつ、二人で様々な運動や動き、ポーズ

を日々生活の次元から試し、また男性の女性を捉える視点を逆手に取って皮肉ったポーズや動きを収集していくこと等を通して、オリジナルな太めパフォーマンス・メソッドを開発していくと面白いのではないかと思います。そんな実践を積み重ねた先に、このデュオからはとてもユニークで批評的な作品が生まれるのではないかと考えます。

最後に、当日審査に携わり、今回の6作品を審議するには1時間程の時間は余りにも短いと感じました。(当日議論が延びて結果的には2時間程になりましたが。) 今回のような全く異なる価値基準によって作られている6作品を、それと同様に価値観や審査基準も様々な12名の審査委員が審査、議論するということの意義が何なのかをアワード事務局には改めて考えて頂きたいなと思います。バレエや他のジャンルのような明確な価値基準を持たないコンテンポラリーダンスは技術や型の優劣といった括りでは語れませんし、そこを基準に審査するものではありません。分かりやすい基準がないからこそ、そこをどう価値付けるかに対しては慎重にならざるを得ないと思うのです。まずは審査員一人一人が審査するに当たって、それぞれが持っている知識と経験を総動員しながら見出したダンスの意味にまずは耳を傾ける時間が必要ですし、それを経た上できちんと議論することがとても重要だと思います。そこを軽んじ、性急に物事を決めてしまうことはダンスに対する思考停止を生み、このアワードの価値を単なる権威づけの賞レースにしてしまう危険があります。そうならない為にも審査員がきちんと議論できるだけの審査時間の確保、更に言えば、その審査が多角的に審議されるよう、例えばダンスに対しての言説に責任を持っているダンス批評家やダンスドラマトウルクといった人を審査員に加えることを検討しても良いのではないかと思います。また、審査の過程を、例えば今回のような選評という形できちんと公表することまでを含め、審査という位置づけを捉え直してみても良いのではないのでしょうか。なぜなら、そこで生まれた言説がより多くの人々に開かれることで、議論の場や思考を育む場を生み、それが次代を担う振付家を生み出していく、そんな循環を生む土壌を育てることもアワードが持つ大きな意義なのではないかと考えるからです。

トヨタ・コレオグラフィーアワードがこれからも単なる品評会ではなくアーティストと観客がダンスを通して共に多様で豊かな社会や、そこで生きる一人一人の行き方、その未来を考える場として開かれていくことを切に願っています。